



神論



第三章 神の永遠の聖定

3.1. 神は永遠の前から最も知恵の中で、ご自身の御心の聖なる計画によって自由かつ不変に起こって来るべきことも定められました（エペソ 1:11、ロマ 11:33、ヘブル 6:17、ロマ 9:15, 18）。しかし、このような方式ですべてのことを定めておいたのですが、神は罪の助成者ではなく（ヤコブ 1:13, 17、Iヨハネ 1:5）、被造物が、彼らの意志に逆らい強制に行うこともさせず、また第二の原因の自由や偶然性を除去することもなく、むしろ確立させます（使徒 2:23、マタイ 17:12、使徒 4:27-28、ヨハネ 19:11、箴 16:33）。

神の聖定は知恵に満ち、聖く、自由そのものです。神の聖定は、神ご自身の計画に従って全能なる力によって実行されることで、神ご自身の栄光を現わすことです。1項では、三つが強調されています。第一に、神は、罪の助成者ではありません。神は命の助成者です。第二に、神は人間の意志を強制的に侵害なさる方ではありません。第三に、神の計画は第二の原因等を採用します。ウェストミンスター総会の当時、総会長であるウィリアム・ツイス（William Tisbe）を始め、多数の会員が墮落全選び説をついて行きました。それにも関わらず、総会は墮落後選び説を排除せずに、その部分については論争は避けました。

勿論その当時、ソツィーニ主義者、アルミニウス主義者、イエズス会主義者たちは、神の聖定がなくても、時間になればことは起こるようになっていると主張しました。神の聖定が人間のことと関連されているから、時間の中で成し遂げられるしかないと言ったのです。さらに、アルミニウス主義者たちは墮落全選説は、神を罪の原因者とする事だと言いながら反対しました。従って、ウェストミンスター総会員たちは、予定論が、神を罪の助成者とさせることではないと明確にさせ、神の聖定は効果的であり、許容的であるが、許容的聖定とは、人間の腐敗した行為を通して表れる罪悪と関連するとししました。このように神の聖定は、純粋な行為とに關連しては効果的で、道徳的な悪を犯す腐敗した行為と關連しては許容的です。また、1項では、神の聖定が人間の自由を奪うことではないことを説明しています。神の聖定は、未来のことを確かに決定されていることとして、その実現において、第二の原因等を排除せずに、神は自由に行われるのです（箴 16:33）。

3.2. まして神は、認知できる条件に基づいて、あらゆる事が起こることも知っておられるけど（使徒 15:18、I サムエル 23:11-12、マタイ 11:21, 23）しかし何事でも、すでに未来のことを知っておられたから、あるいは、そのような条件に基づけば起こって来るであろうと予知したから、聖定なされたものではありません（ロマ 9:11, 13, 16, 18）。

2項において念頭においている誤り等々は、ルター主義者、アルミニウス主義者、ソツィーニ主義者、ローマカトリック主義者の予定教理です。先ず、ルター主義者とアルミニウス主義者は、予定教理が条件的だと主張しました。予定は、信仰を最後まで守るのかどうかにかかっているとしました。人々の意志にかかっているというのです。ソツィーニ主義者とローマカトリック主義者は、予定教理が、人々の善行を維持させるかどうかにかかっているとします。

今日のパウロの新しい観点 (New perspective on paul)は、ローマカトリックの主張と同じです。

3.3. 神の聖定によって、そして、神の栄光が現われるために、ある人々と御使いたちとを永遠の命に至るように予定され (I テモテ 5:21、マタイ 25:41)、他の人々は永遠の死に至るように、あらかじめ定められました (ロマ 9:22-23、エペソ 1:5-6、箴 16:4)。

予定は、選びと遺棄とに構成されています。それを、二重予定論と呼びます。選びでは、神の恵みがどれほど大きいのかを現わす目的があり、遺棄では、神の公儀を現わす目的があります。選びにおいて、イスラエルの場合は、集団的な次元で、すべての民族に神を知る知識を示すために選ばれたことと、個人的な次元では、選ばれた者だけが救いの恵みを得ました (ロマ 11:5)。

3項において念頭においている誤り等々は、先ず、ソツツイーニ主義者ですが、彼らは、被造物の自由の決定を優先とします。そして次に、アルミニウス主義者ですが、彼らは、人間の決定と行為を神があらかじめ知っておられ、それを根拠にして選んだと主張します。アルミニウス主義者たちは、無条件的選びを反対し、条件的選びを主張します。3項の言及からして現代神学の誤りを発見することができます。開かれたオープン神論 (open theism)として、神は人間の行為に応じて行動なさると主張しています。予定論を極端に反対する神学であり、神の主権の居場所は何処にもありません。

3.4. 予定されていて、あらかじめ定められている御使いや人々は、個別に、また不変的に定められていて、彼らの数は確実、また確定的で、それは増加したり、減少されたりしません（Ⅱテモテ 2:19、ヨハネ 13:18）。

3.5. 神は、命に至るように予定されている人々を、創造の前から、ご自身の永遠なる不変の目的と密かな計画とに従って、ご自身の善と良しとする御心に従って、キリストにあって選び、とこしえまで栄光に至るようにされました（エペソ 1:4, 11、ロマ 8:30、Ⅱテモテ 1:9、Ⅰテサロニケ 5:9）、神は、値なしに与える恵みと愛によって彼らを選ばれ、神が彼らの信仰や善行行為、あるいは、彼らの内で信仰を守ること、あるいは、被造物の中にある、その他の何事かを先にご覧になり、それらを条件にして、あるいは、神を感動させるほどの原因等があったから、選んだのではなく（ロマ 9:11, 13, 16、エペソ 1:4, 9）すべての者により、神の栄光ある恵みをほめたたえさせました（エペソ 1:6, 12）。

清教徒たちは、贖い契約の概念を用いました。父と子との間に、選ばれた民に対する贖いの方​​法について約束されていたというのです。清教徒たちは贖い契約の概念を、イザヤ書 53 章 10 節とヨハネ 17 章 1-5 節を根拠にしています。勿論使徒パウロの、世界の基が置かれる前からキリストにあって私たちを選ばれたという、エペソ 1 章 4 節の御言葉を言及しました。

また清教徒たちは、神の選びの永遠なる目的を「私たちを聖くさせること」と強調しました。それは、聖化の効果が表れてこそ、その人の選ばれたことが確認できるとの論理です（ロマ 8:29）。本人は選ばれたと言いながら、自分から聖化の恵みと証拠が表れないのなら、自分だけの偽り確信だというのです。

ここには、神学的な理由と論拠がありますが、キリストの仲保の働きを通して選びが有効にされ、選ばれた民の効果は、キリストの中にあることです。選びが有効にされた民には、キリストの中にある証拠がはっきりと表れるしかないということです（ガラテヤ 2:20）。さらに神の選ばれた民には、神の時に、聖霊による聖くさせる御業、あるいは、聖霊の有効な御業によって、悔い改めと信仰が起こるようになるでしょうし、それは、聖化として証しされるようになるからです（Ⅱテサロニケ 2:13）。

清教徒たちのこのような叙述において、最も、強く反対したのはアルミニウス主義です。アルミニウス主義者たちは、神の聖定が時間上では先立つと言っても、その実際的な効力は、人間の行為が成された後に、ついに発効すると語ります。神の選びが、人間の意志的な決定に依存すると主張します。これは、三位の神の贖いの働きを徹底して無視している神学です。21世紀においても、このような神学は、相変わらず優勢を保っています。一方、ソツィーニ主義者たちは、時間の中で選びが成し遂げられたと主張しますが、これもやはり誤りです。

選びを反対する神学も問題が大きいです。予定教理を乱用する神学も問題です。ハイパーカルビン主義（Hyper-Calvinism）は予定を乱用して、神の主権だけを強調し、人間の責任を完全に無視します。例えば、ハイパーカルビン主義は、神が定めて置いた人々は、神が、神の時に救うと言いながら、伝道をしないのです。そして彼らは、まして「聖霊の有効な御業が、まだ起こらなくても救われる」と言います。なぜなら、神が予定して置いたからだと言います。彼らの神学が誤りだというのは、神の選ばれた民に救いが起こさせれる時、手段と方法を定めておいたのに（6項で説明している）、それを無視することです。神は、福音説教が行われている所で、ご自身の選んだ民を救われるからです。

3.6. 神は、選民たちを栄光に至るように定められたように、その御心の永遠なる最も自由な目的に従って、その目的を成し遂げるために、すべての手段をあらかじめ定められました（Iペテロ 1:2、エペソ 1:4-5, 2:10、IIテサロニケ 2:13）、それゆえ、その選ばれた者たちは、アダムにあって墮落したが、キリストにあって贖われ（Iテサロニケ 5:9-10、テトス 2:14）、時がくれば、聖霊の御業によってキリストへの信仰によって有効に召命されます。彼らは義と認められ、子とされ、聖とされ（ロマ 8:30、エペソ 1:5、IIテサロニケ 2:13）、神の御力によって、信仰を通して救いに至るまで守られます（Iペテロ 1:5）。ただ選ばれた者以外は、他の誰もキリストによって贖われたり、有効召命されたり、義と認められたり、子とされたり、聖化されたり、救われることはできません（ヨハネ 17:9、ロマ 8:28、ヨハネ 6:64-65、ヨハネ 10:26, 8:47、Iヨハネ 2:19）。

アダムにあって墮落しました。しかし神の選ばれた民は、キリストにあって贖われます。神の選んだ者の贖いのために、定めて置いたのは、キリストの人格と働きです。キリストが真理であり、命となる理由です。神は、ただキリストを通してのみ、私たちが救われるように定められました。従って、キリストによって、キリストと共に、キリストにあって、すべての救いの祝福が私たちに流れ入ってきます。そういうわけで、キリスト以外では救いはありません。

ところが、予定の実現の手段をも定められました。それゆえ、神の選ばれた者が手段なく救われるわけではなく、必ず、神の御言葉の手段の下にいないといけないのです。神が、定められた手段を使用する中で、選ばれた民が現われますが、これを「聖霊の有効召命」と呼びます（使徒 13:48）。神は、常に聖霊によって私たちの救いを有効になさいます。聖霊は、キリストの贖いを、選ばれた者たちに適用させ、キリストへの信仰を持つようにされます。従って聖

霊の御業によって、キリストへの効果的な召命が私たちに必要です。このように有効召命を受けた者には信仰が発生され、その信仰によってキリストへと結合され、義認、子とされ、聖化、堅忍の恵みが与えられます。そのような中で聖化は、目で確認できる恵みですので、まことに選ばれた民なら聖化が表れるようになります。それは、選びと共に、選びの手段と目的を定めて置いたからです（エペソ 1:4）。

6 項の叙述から、二つの誤りを確認することができます。アルミニウス主義者は選び教理を反対しますが、主の恵みではなく、自分たちの意志から出る信仰によってキリストを受け入れ、自分が信仰を最後まで守れば救われると言います。彼らの主張は、悔い改めと信仰を起こさせる、聖霊の有効な御業を否定することです。また、聖化の主となられる聖霊の御業も否定しています。もう一つの誤りは、道徳律廃棄論主義者です。彼らは義認だけがあっても救いを受けられ、聖化は、救いのための直接的要素ではないと主張します。勿論、聖化があれば良いけれど、なくても救われると主張します。

しかし聖書では、聖化が救いの必須要素だと語っていて（ヘブル 12:14）、選びの目的が聖化だと語っています（エペソ 1:4）。道徳律廃棄論主義ともいえる、ハイパーカルビン主義も誤りです。ハイパーカルビン主義は、神の選ばれた民は、神に救われると言いながら、伝道を行いません。そして選ばれたなら、聖霊の有効な御業がなくても、救われたと言います。ハイパーカルビン主義は、英国で 1690－1790 年に流行したものとして、今日にも教会で簡単に見ることができる誤りです。このような誤りによって教会は、肉的になり世俗化されます。

従って 6 項の後半部は、選びと聖霊の有効召命、そして義認、子とされ、聖化とを連結させて述べたのです。清教徒たちが、このように連結させて語り始めたのは、ウィリアム・パーキンス「黄金の鎖」（1591 年）以降から、ドルト信

条 (1619年) でも「黄金の鎖」という用語を用いますが、聖霊の有効な御業を否定する、選び教理を反対するアルミニウス主義者を論駁するためでした。しかし6項では、パーキンスより、さらに進んで、キリストとの結合教理を入れて、選び=聖霊の有効召命=キリストとの結合教理を入れて、選び=聖霊の有効召命=キリストとの結合(義認、子とされ、聖化、堅忍)の順序で説明することで、救いの過程教理と、キリストとの結合教理をバランス良く叙述しました。このような順序は、ウェストミンスター信仰告白書10章において有効召命を扱い、11章では義認、12章では子とされ、13章では聖化を扱うことで、さらに強調されています。

3.7. 神は、ご自身の計り知れない御心に従って、恵みを与えたりも、取りやめたりもなさいますが、ご自分の被造物に対する主権のみ力と栄光のために残りの人類を選ばずに、彼らの罪に対して恥辱と怒りを受けるように定め、ご自分の栄光ある公義をほめたたえさせることを良しとされました(マタイ11:25-26、ロマ9:17, 18, 21, 22、IIテモテ2:19-20、ユダ4、Iペテロ2:8)。

ウェストミンスター信仰告白書は、「遺棄」という言葉をほとんど使用していません(33章で一度使用)。遺棄とは、神が一部の人々は捨ておかれ、怒りを受けるように定めたのです。遺棄された理由は、彼らの罪のせいです。このように遺棄教理は、神の公義を現わすためにです。勿論、選び教理は、神の無限なる愛を現わすための目的を持っています。

このような説明の背景には誤り等々があります。先ず、クエーカー主義者たちが主張する神は、どの人も滅びに至るようにしていないと言います。最も、

ローマカトリック主義者、アルミニウス主義者、ソツツイーニ主義者たちは、すべての人々がキリストによって贖われると主張します。ただ選ばれた者だけが救われるとは、間違っていると主張します。

このような誤り等々は、現代教会に相変わらず共存しています。人間が死んだ後に審判はないという霊魂滅絶説の主張があって、死後に新生できるという神学と地獄はないという主張もあります。みなが神の愛の属性だけを強調して、神の公義は断る神学なので、明白な誤り等々です。

3.8. 高度に神秘的なこの予定教理は、特に慎重に注意しながら扱われなければなりません（ロマ 9:20, 11:33、申 29:29）。それゆえ人々は、その御言葉に掲示されている神の御心に注意し、それに従順する時、彼らの有効召命の确实性により、彼らの永遠の選びを確信することができます（Ⅱペテロ 1:10）。従ってこの教理は、神を賛美し、敬い、慕うべき理由が提供され（エペソ 1:6、ロマ 11:33）。そして福音に真実に従順するすべての者たちは謙遜になり、熱心になる時、豊かに慰められる理由を提供します（ロマ 11:5-6, 20、Ⅱペテロ 1:10、ロマ 8:33、ルカ 10:20）。

神の御心は、部分的には隠されていて、部分的には現われています（申 29:29）。従って神の予定は、実現される以前までは、私たちが知ることはなく、効果が表れることで知ることができます。選ばれた者は聖化を通して、選ばれたことを確認することができます。遺棄された者は、その墮落を通して捨てられたことを確認することができます。このような予定教理を牧会的に適用した神学者がウィリアム・パーキンスです。⁸⁵従ってパーキンスは、信者たちが自分に聖化があ

るかどうかを確認するように挑戦させて、墮落した場合は、遺棄教理に該当されると強調し、警告し、信者たちに霊的注意を促すようにしました。そうしながらパーキンスは、遺棄教理を扱う時、墮落と背教の効果が出る以前までは、誰にも遺棄教理を適用させてはならないと慎重にすべきことを頼みました。なぜなら神は、どのような罪人も悔い改めさせて、救われるからです。

パーキンスを始め清教徒たちは、予定論を思弁的に扱うことをせず、体験的に扱いました。それを、体験的予定論 (experimental predestination) と呼ばれたりもします。信仰告白書においてのこの項目は、思弁的や好奇心によって予定教理を扱ってはならないと言及しています。予定教理は、ただ新生している者たちが霊的な目を持ちながら理解できるものです。それでカルヴァンは、予定教理をキリスト教綱要 (1559) 第三卷 21-24 章で扱いました。このように説明するのが聖書的で、パウロは、ローマ書 1 章-8 章まで救いの恵みを説明し、9 章で予定教理を説明したのと同じ論理です。まだ新生されていなくて予定教理が理解できないのなら、神の御言葉に啓示されている、その御心に注意すべきです。結局、選び教理は、救いの恵みを悟った者に、救いの根拠と原因が神にあることを認めさせ感謝するように、苦難を受けている真の信者たちには、慰めを与える教理です。

85 Golden Chaine (1591) 、Exposition of Symbole (1595) 作品がここに該当されます。